

## 1 . た ・ づ ・ な

### 「経験と科学」

日本中央競馬会  
日高育成牧場  
副場長

平賀 敦



サラブレッドの1歳セリ市場を訪れてみると、馬の躰が行き届いていることを実感します。セリ上場にむけてのコンサイニングの普及の影響もあるのですが、生後まもなくからの馬への接し方全般が変化してきていることも大きく影響しているものと思われます。JRAがセリで購買した1歳馬の騎乗馴致の状況を見ても、以前に比べて手がかからなくなっているようです。

いうまでもなく、サラブレッドは頭がよく感情豊かな動物です。人と馬との関係を良好に保ちながら、競走馬としての躰を行なうためには、馬の状態を把握し、臨機応変に対処する感性が人間側にも求められます。近年では、従来から競走馬の世界で用いられてきた方法論だけでなく、乗馬の世界などで用いられているさまざまな手法をも包含した新しい取り組みが行なわれるようになってきており、成果があがってきているように感じられます。

生産された馬たちを競走馬としてデビューさせるためには、それぞれの段階に応じた飼養管理を適切に行なう必要があります。長年の経験や技術に裏打ちされた管理の重要性はもちろん高いものの、人間が持つ感性や技術あるいは経験には大きな個人差があることもまた事実です。

私はJRAに獣医師として入会以来、主として競走馬の運動生理学に関する研究に従事してきました。最近では、いわゆる研究や学会活動だけでなく、研修会や雑誌の連載などを通して、研究で得られた知見を普及する活動も行なっています。これらの活動を通して感じることは、競走馬に関わる人たちのなかに、経験と科学とを対立する概念としてとらえるのではなく、経験の裏打ちとしての科学の重要性を改めて見直そうという動きが出てきているということです。JRAの美浦あるいは栗東トレーニングセンターで競走馬のトレーニングに関わっている関係者の中にも「経験を裏打ちする科学」を求める声が大きくなってきていると感じています。実際、研修会などでの熱気は以前とは様変わりしています。

北海道をはじめとする生産地においても、従来からのサラブレッドの生産牧場に加えて、育成やトレーニングに関係する施設が増えてきており、それに伴い、新たな知識の習得に対する関心が高まっています。この傾向は、私が以前JRA日高育成牧場に勤務していた1998～2004年当時でも既に感じられましたが、昨年6年ぶりに赴任してみると、その傾向はより強くなっているようです。

繁殖牝馬や若馬の栄養管理、あるいは若馬のトレーニング管理の面において、経験を裏打ちする科学的データを利用する試みが行なわれるようになっていきます。繁殖牝馬に関していえば、できるだけコンスタントに子馬の生産が行なわれることがベストです。栄養状態をよりよく管理することが繁殖成績を向上させることは容易に想像できますが、それはそれほど簡単ではありません。この際に、ボディコンディションスコアを記録しながら適切な飼養管理を行なうことで、経験に科学的データを加

えることが可能です。実際に、ボディコンディションスコアを記録しながら栄養状態を管理した結果、良好な繁殖成績が得られた例もあります。また、1歳馬・2歳馬についてもボディコンディションスコアを用いて栄養管理を徹底して行なった結果、成績が以前よりも向上したという記事を目にしたことがあります。

当歳から1歳にかけても、蹄の病気や発育に起因する骨疾患などは大きな問題になってきました。これらについても、獣医師や装蹄師だけでなく、日ごろ管理を行なう牧場関係者とも科学的な知識を共有することによって、対処していこうという試みが行なわれるようになってきています。また、これらの問題は栄養との関連も指摘されていることから、栄養指導の重要性もまた以前よりも高まってきています。事実、栄養コンサルティングを行ない、よい成績を上げている牧場もあります。また、馴致後のトレーニングにおいても、運動中の心拍数や血中乳酸濃度を測定しながら、調教に取り組んでいる例もあります。これらの試みもいずれ結果を伴ってくるのではないかと考えています。

科学的データは、感性などに比較して客観性が高いことに重要性があります。つまり、ある程度の客観性のある数字を物差しにして、関係者の経験や感性の“目あわせ”をして、経験や勘の裏打ちをすることが出来るという点です。経験に科学の目を加えたからといって、そのことが直ちに強い競走馬を作ることにつながるわけではありませんが、科学的な目を加えることは相当大きな武器になることは間違いありません。経験と科学とを対立する概念としてとらえるのではなく、経験を裏打ちする科学を皆で共有するという視点が重要だと思います。